

赤竜

赤竜とはミミズの別名なのだが、なかなかの見立てではないかと思う。ちなみに石竜とはトカゲであり、土竜とはモグラ、これらの呼び名も雰圍気がある。通常は蚯蚓と書くが、これでミミズとは読めないから、キューインというのが彼等の本名らしい。丘を引く虫というのも、なんか大きくて良い。古典落語などではミミズではなくメズと呼んでいるから、おそらく語源は「目見え」なのではないか。そういう事は検索をかければ出てくるだろうが、それを元に文章を書くのもなんなので、敢えて調べずにおこう。

この赤竜（せきりょう）先生、漢方薬の方では地竜と呼ぶそう。天に竜の有る如く、地中にも竜の住める也。「土中有竜」などと書けば「土中有火 不打不発」みたいで何かイイ。何故漢方薬なのかといえば、解熱剤になるからで、それを扱った「ミミズ医者」という浪曲があった。貧乏で流行らない町医者が、薬も出せないのでやけになって、庭で掘ったミミズを煎じて患者に飲ませたところ、どんどん病気が治りはじめて、大繁盛をするという物語。干してから使うのが工夫らしく、そもそもミイラにはそういう効能があるらしい。ミイラ取りがミイラになる、というのは薬の原料を探しに行く人達の事。危険を冒して砂漠などに採しにいったのかもしれない。薬屋の入り口に飾っておけばその店が信用されたと……これは箱崎先生の講義で聴いた話です。

土を耕して蚯蚓を切る、という諺がある。あるにはあるが、何を云わんとしていいのかよくわからない。懸命に土を耕していたら蚯蚓様に危害を加えてしまったゴメンナサイという事なのか。そういう事が起きやすいからキョツケナサイという事なのか。目的を達するために何かを破損してしまった時「どうやら土を耕して蚯蚓を切ってしまったようですな……ふふふ」とでも使ってみるか。何にせよ含みのある言い回し。ただ蚯蚓は身体を切られても簡単にはくたばらないそうで、大した生命力ではあります。

夕べに道を聞く事を得ずして、朝に大道に出でて死す。教えんとするも耳もなし。嗚呼、縁無き衆生は度しがたし。蚯蚓勢いをつかし、長うなり、短くなつて曰く。昔知勝仏のとき、我問うて曰く「我等何を喰らいて生を保たん」
仏の曰く「土を喰へ」と。

我等、土の尽きんことを恐れて又問ふ。「もし土尽きたれば何をか喰わん」
仏の曰く「土を尽きたれば大道に出でて死すべし」と。

此の故に、今に至つて、夏の土用に大道へ出でて死す。故に死も私ならず。生もまた私ならんや。況んや生死の外なるものをや」

翁の曰く「私無きは即ち私。なんぞ私無しとはいはん。必ず修行倦む事なれ」ト。

買卜先生糠俵

さてさて、こんな話ばかりでは、どうしてミミズが彫刻の題材になったのかという説明が全くなされていない。加えて言えば、それをどうして布と綿で作らねばならないのか、必然性も感じられない。「それはですね。たまたまそこに布と綿があっただけの話でね……」そういうえば、造形的にも別段凝ったところは何もなくて、おそらく他の人でも同じようなものが作れるのではないか。「その通り、誰にでも作れるが、誰も作らない。そこが肝心なところデゲス」という事しておこう。頭の固い人にはつまらないかもしれないが、アネット・メサジエなら面白がつてくれるよ
うな……気がする。
(上野茂都)

